

島崎藤村とジャック神父

二〇一七年六月二十八日

バイブル・サービス

大本泉

一 島崎藤村について

島崎藤村は、日本の近代文学における代表的な詩人・作家のひとりです。一八七二(明治五年、長野県に生れて、戦時中の一九四三(昭和一八)年、『東方の門』執筆中に亡くなりました。最初は、北村透谷らと「文学界」を創刊し、浪漫主義的な作品を発表します。その結実として『若菜集』(明治三〇)という詩集が誕生しました。日本近代文学史では、これにより、近代詩が確立されたと評価されています。その後、『破戒』(明治三九)にて小説に転じ、自然主義の代表作家となります。発表後、夏目漱石がこの作品を絶賛しました。そして『春』(明治四一)『家』(明治四三〜四四)『新生』(大正七〜八)等の自伝的小説を発表し、長編『夜明け前』(昭和四〜一〇)を完成します。一九一三(大正二)年から一九一六年までフランスへ渡ります。一九三五(昭和一〇)年に日本ペンクラブが結成され、初代会長に就任し、翌年、国際ペンクラブエノスアイレス大会にも出席しました。

二 島崎藤村と仙台

一八九六（明治二九年九月、藤村は数え年二五歳の時に、約一〇カ月間ではありますが、仙台の東北学院に赴任しています。

藤村が仙台に着任するまでには、様々な問題を抱えていました。それまで藤村は、明治女学校の教員をしていたのですが、教え子佐藤輔子への愛に苦悩し、同校を辞任します。そして一〇カ月近くに及ぶ放浪後、復職しますが、北村透谷の自殺、兄の収監、輔子の死、そして実家の火事等といった不幸が重なります。そのような失意からの来仙について、藤村は「生涯の夜が明けて行くような心持」だったと述べています。それは、藤村にとって、仙台に滞在することが、自分の人生にとって重要だったということを意味しています。

東北学院での担当科目は、日本文文 (Japanese Composition) と訳読 (Translation) でした。お米が一〇キログラム約八五錢四厘の時代に月給が二〇円だったので、高給取りとは言えなかったかもしれません。でも、単身ですし、母親への仕送りもいくらかできて、勉強と詩作に没頭できる貴重な時間を得ることができました。

一八九七（明治三〇）年七月、藤村は別れを告げ、夜行に乗って上京します。そして八月一九日、『若菜集』を刊行しました。

『若菜集』に収録されている、たとえば「初恋」を知っている方は多いと思います。

「まだあげ初めし前髪の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛はなくしの

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

うすくれなる
薄紅の秋の実に

人こひ初めしはじめなり（以下省略）

文語体ではありませんが、日本人が、翻訳詩以外で人を愛する気持ちをこれほど素直に詠うのは初めてのことでした。そして、「初恋」の思いは、古今東西、普遍的に多くの人が共感できるものでしょう。『若菜集』によって近代詩が確立されたと先に触れたのは、こういうことからなのです。

そして私達は、このような名作が、藤村の仙台滞在中に作られたことも注目する必要があると思われる。

三 ジャック神父について

さて、在仙時代の藤村が、英語の一層の上達のためにも、現在の尚絅学院大学の創設者ミス・ブゼル（Anny Syrna Buzell）との知遇を得たことはよく知られています。ところが実は、仙台白百合学園の前身である仙台女学校創設に携わったジャック神父にフランス語を習っていたことはあまり知られていないと言っているでしょう。蛇足ですが、ジャック神父について、藤村を専門とする研究家に伺ったところ、ジャック神父の存在すら知らなかったおっしゃっていました。

それでは、ジャック神父とは、どのような方だったのでしょうか。

ジャック神父 (Claude Jaquet) は、一八五六年、フランスリヨン教区に生まれました。パリ伝道神学校を卒業後、一八八一 (明治一四) 年、布教のために来日します。母国で文章学、理学、法律、「テオロジ」(神学) を修得しました。日本では、一八八二年、仙台に着任し、東京築地、盛岡の天主教会を経て、一八九二年、再び仙台に赴任したようです。

元寺小路教会は、一八七八年に誕生し、その翌年には敷地内に仏語学校中心学舎が開校されています。ジャック神父は、同教会を創設したプロトラン神父の離仙後、入仙しています。以来、三年半にわたり、仙台で日本語を学び、教会で洗礼を授け、中心学舎でフランス語を教え、地元の人との交流につとめたのです。

中心学舎廃校後、ジャック神父は信者の子どもたちを集めて、同教会内に無許可の小学校を設けていたのですが、これが後、正式な認可を受けて尋常小学校、高等小学校へと発展していきます。

一八八五 (明治一八) 年から一八九一年まで、ジャック神父は盛岡へ転任し、真愛小学校・盛岡女学校 (現盛岡白百合学園) 設立のために、土地の購入から力を尽くすことになりました。

ジャック神父は、一八九二 (明治二五) 年に仙台に戻り、一九二七 (昭和二) 年に帰天なさるまで仙台カトリック教会 (元寺小路教会) の主任司祭として活躍します。

仙台に戻られたジャック神父について、当時の新聞は次のように触れています。

「○ジャック宣教師当市へ来る 盛岡四ツ家町天主教会主任仏国宣教師グロート、ジャック氏は当仙台同教会転動を命ぜられ去十九日を以て同地を出発当市へ転勤せりと」

〔東北日報〕明治三五年二月三三日付

「ジャケー氏は久しく盛岡にありて人望を博せる徳望家にして宣教師其職に適せるの人なりと聞く 吾人は同信徒の爲めに欣賀不慚」

〔東北新聞〕明治三六年一月五日付

一八九二年頃、教会内のちょっとしたトラブルや、地元での反キリスト教的な動きもあったようですが、人徳のあるジャッケ神父の仙台への再来は、仙台白百合学園にとって幸いだったといえます。

一八九二年、「私立仙台女学校」設置が認可され、翌年、「私立元寺小路高等小学校女子部」が「私立仙台女学校」と改称されて開校されました。

ジャッケ神父がいらっしやらなかったら、現在の仙台白百合学園が誕生しなかったかもしれないし、少なくとも設置が遅れ、仙台市で設置された、もっとも古く歴史のある女学校として創設されなかったかもしれません。

ジャッケ神父は、仙台市の教育の領域でも貢献し、旧制三高や東北帝国大学（現東北大学）等でフランス語、ラテン語を教えました。一九二七（昭和二）年、仙台にて亡くなるまで、神様から与えられた使命を全うなさいました。

四 島崎藤村とジャッケ神父

藤村が在仙中、フランス語をジャッケ神父より習っていたことは、次のような随筆から窺うことができます。

「寡慾で、謙遜で、且つ篤学な、人に知られようとも思はない土屋君のことを考える度に、私は仙台のジャッキ先生を聯想する。ジャッキ先生はもと仏蘭西人で、天主教の伝道師として渡来された人だが私は先生に就いてすこしばかり語学を習つたのが縁で先生の人となりを知るやうに成つた。丁度禅宗の坊さんにでもありさうな人で、黒い質素な法服を着て、極めて沈着した宗教的生活を送つて居る。最早三十年の余も仙台に居る。」

〔浅間の麓〕一九〇六年『新片町より』所収

ジャッケ神父が、清貧を重んじ、宗教心に篤い方であつたことも理解できます。そしてジャッケ神父が、語学が堪能で博識であつたこと、さらに、地元根付いた布教活動を目指していたことも、次の藤村の文章からも読みとることが出来ます。

「仙台へ来て弱つたことは、言葉の訛りの多いことでした。(中略)／＼ここに一人、耳の好い人がありました。／＼その人を仙台から連れて来て、はじめて用が足りたといふことでした。そんな漁師言葉の通弁を誰がつとめたかと言ひますに、その耳の好い人は最早三十年近くも仙台地方に住む外国の宣教師でした。羅馬旧教を弘めに日本へ渡つて来た人で、ジャッキといふ名前の仏蘭西人でした。このジャッキ先生、希臘語の智識もあつて、学問のある坊さんでしたが、年百年中、同じやうな黒い帽子をかぶり、黒い服を着て、服装にも振りにもかまはずに荒浜の方まで宗旨を弘めに行くうちに、そんな漁師言葉の通弁がつとまるほど、好い耳を持つやうになつたのです。」

〔耳の好い人〕一九四〇年『力餅』所収

フランス人のジャック神父が、当時の宮城県の漁師ことばを通訳したほど、地域の人々と共生し、ミッションを全うしようとなさっていたことがわかります。

五 おわりに

藤村が、なぜ一九一三年からフランスに行ったのかという理由については、多くの研究家が、藤村自らの「新生」を求めていたからだろうということを認めているようです。藤村は、妻亡き後、姪のこま子に身の回りの世話をさせていたのですが、間違いを犯してしまいます。そういう二人の關係に距離を置きたい、一種の現実からの逃避行だったのかもしれませんが。

それでは、なぜ数ある外国の中でフランスを選んだのかということについては、藤村がフランス文学に明るかったことが大きい理由でしょう。パリで一緒に行動していることから、画家の正宗得三郎（作家正宗白鳥の弟）が受け入れてくれることがわかった上での決断だったのかもしれません。

そして想像の域を超えていないかもしれませんが、私は、藤村の罪の意識が仙台在住時代に交流のあったジャック神父を思い出し、そこから連想されるフランスへ渡ろうと決意する理由のひとつになったのではないかと思うのです。

さらに文学を研究する立場として見逃せないのは、次のようなことです。藤村が在仙中にジャック神父からフランス語を習ったことがフランスの詩歌や小説に興味を持つようになつたのか、フランス文学に興味をもつたためにフランス語をジャック神父から習うことになつたのか——どちらが鶏でどちらが卵かわかりませんが——、後々の藤村が浪漫的な詩から移行して、フランスの作家エミール・ゾラ等の影響のあつた自然主義的小説を執筆していく

ことの遠因として、仙台でジャック神父と出会ったことが、後の作家藤村を育む萌芽となったと考えられることなのです。

他に伝道師でもあった詩人の山村暮鳥もジャック神父からフランス語を習ったようです。また東北大学名誉教授勝本正晃等も随筆で、晩年のジャック神父からフランス語とラテン語を学び、その人となりに触れています。

けれども、これらの資料だけでは、ジャック神父についての詳細は、明らかだとはいえないでしょう。フランス教区内にある伝道史料を追っていくと、どのような辞令が出て日本にいらっしやることになったのかについてもわかるのかもしれませんが。仙台白百合学園創設にご尽力くださった方ですし、旧制二高や東北帝国大学でフランス語・ラテン語を教えていらしたので、藤村以外にも影響を受けた、当時の学生がその他にたくさんいるはずですよ。今後の課題は、藤村以外の人々のジャック神父に関する文章を探し、ジャック神父がどのような方だったのか一層理解を深めることです。またジャック神父が、どのような経緯で日本にいらしたのか、そのミッションについては、当時の史料がフランスの教区内に保存されていると思われる。フランス語の単能などなたか、教えていただければ幸いに存じます。

このように、調査の途中ではありますが、皆様にもジャック神父の存在を知っていただきたく、本日は、島崎藤村との関係をとおして窺われるジャック神父について触れさせていただきました。

ありがとうございます。(当日、時間の都合上、触れることのできなかつたことにも若干加筆しています)

(グローバル・スタディーズ学科教授)